

## 武蔵野市エコプラザ（仮称）検討市民会議（第2回） 議事要録

- 日 時 平成29年4月27日（月）19時開会 21時閉会
- 場 所 武蔵野市役所811会議室
- 出席者 委員15名、事務局4名  
小澤（紀）委員長、鈴木（雅）副委員長、大沢委員、大谷委員、  
小澤（里）委員、上吉川委員、木村委員、塩澤委員、志賀委員、新立委員、  
鈴木（圭）委員、田中委員、長島委員、村井委員、郡委員
- 議事等 1 委員自己紹介  
2 環境に関する講義  
(1) 「環境デザインの視点」  
(2) 「環境教育からESDへ」  
3 意見交換

### 1 委員自己紹介

発言者	要旨
委員	多摩信用金庫から参加。
委員	「みちまちみどり」という情報誌を出している。

### 2 環境に関する講義

#### (1) 「環境デザインの視点」 副委員長

要旨
<p>配付資料「共時態の環境デザイン展」は、教え子のパネル展示を縮小して作ったもの。「共時態」とは、過去は関係なく、今現在何をやっているかという捉え方で、この冊子も直近5年以内のものだけを掲載している。</p> <p>デザインには、建築デザインやファッションデザイン、カーデザイン等色々なデザインがあるが、環境デザインだけ他と違うところがある。他のデザインは、建築をデザインする、車をデザインする、ファッションをデザインするとなつて、デザインが目的語になるが、環境をデザインするのは神様しかできない。私は環境とデザインする、環境にデザインすると言っていた。英語で言うと「of」ではなく「with」、「design with environment」。冊子には、色々なプロジェクトがあるが、私自身はランドスケープデザイン、都市計画や建築、グラフィック、あるいは人間関係を考えたりしてきた。</p> <p>対象とする分野が幅広いことがわかってもらえると思う。</p> <p>農業の産業化やUR都市機構の公営住宅の震災復興、福島県の牧場、筑波山の梅林再生プロジェクトなど、中には今も続けているものもある。</p>

今日は、昭和記念公園の「花みどり文化センター」という施設について、基本構想から基本計画まで建築家と一緒に作り、共用化するまで3年ほどかかったプロセスを紹介する。

昭和記念公園からの依頼は、2万㎡規模の施設の構想がある中で、一度に予算化することが難しいので、基本構想を守りながら建物を建築する理由を考えてほしいというものだった。そこで、3千㎡ほどの建物をまず建て、毎年増やしていくことを提案した。メタボリズムという建築の考え方があるが、段々と拡張していく方法で、身の丈に合った建物をつくるということ。

「花みどり文化センター」は、緑の文化を一般市民に伝えるための施設で、博物館の機能を持つ施設として考えられていた。

公園内の建築物のため、建蔽率も容積率も制限はあるが大分余裕があった。最初は小さくつくって、徐々に増やしていく。博物館的には、収蔵・展示・研究・管理の4つの機能があるので、収蔵が足りなくなったら収蔵庫をつくり、収蔵物が集まったらそれを見せる展示の施設をつくる。こうしてどんどん増築していく考え方とした。

屋上の緑化は、うねりがある建物で実現した。建物前の芝生広場「ゆめひろば」は直径が300メートルあり、ガーデンショーなど色々なイベントをする想定で作り、屋上に座って広場を見た時に向こうの景色がそのまま見えるように、縦の格子フェンスを使わずステンレスワイヤーのフェンスにした。

立川駅からの入口は、左右道幅を変えて逆遠近法で錯覚を起こすようになっており、行きと帰りとで遠近感が全然違う「だまし絵」的な道をつくった。

「ゆめひろば」は無料ゾーンなので、お母さん方が子どもを連れてお弁当を食べながら井戸端会議をしている様子が見られる。

建築空間は壁がないので、区切り方でシリンダーごとに貸したり、全体を貸したり色々な形で有料で開放している。研修室として使ったり、個展を行ったり、学会やシンポジウムをしたりしている。外と中を同時に使えるというのが良いところで、ピクニックと展覧会等、中と外で連携した事業が可能。

この施設では、緑化という狭い範囲ではなく、植物と人間の生活という意味で食品企業等も利用している。環境教育のリーダーを育てたり、緑に関するカルチャー教室への貸出しなども行ったりしている。利用料も安く設定され、ほぼ満席の状況。

展示だけでなく、映像で公園の機能等を紹介することもある。武蔵野原風景というプログラムを作り、昔の武蔵野の写真や、NHKのアーカイブから昭和初期の武蔵野のニュース映像などを選んで、映像を映すこともできる。

緑の図書室では、子どもの絵本を中心に、緑や環境に関わる本だけを集めて置いたり、情報検索コーナーを作ったりした（現在は廃止）。

また、公園の植物・昆虫・鳥・両性は虫類・魚類・哺乳類の生物調査を行い、昆虫と植物は各 800 種類ほどを標本化、動植物たちの関係性について展示した。

ここでのボランティアは 100 団体ほどあり、あらゆるボランティア組織の活動の様子を展示している。

カフェは、指定管理者の運営で、メニューはなるべく環境に配慮していることをアピールできるような品揃えをしている。

併設の「昭和天皇記念館」では、昭和天皇と緑の関係を、昭和天皇と親交の深い 3 人の学者、牧野富太郎・南方熊楠・三木茂との交流の様子を含めて展示している。

その他にも、子どもの学びのアレンジで、ポスターのデザイン等、ここでの活動に関する色々なコミットをした。日本中の関連のある施設と交流し、情報交換することも必要だと思う。環境やごみなどに置き換えて考えると、色々な応用やアイデアが出てくると思う。

東日本大震災の際、この施設は帰宅困難者の避難所になった。建築的には非常に丈夫で、全て床暖房になっている。また、昭和記念公園は防災的な公園になっているため、地下貯留の水やトイレ、非常食が震災になる前から準備されていた。

公園の設置は国土交通省が行い、指定管理制度で公園財団や西部造園が管理してきた。指定管理先が変わるところが運営の大変なところで課題はあるが、1 年間で 100 万人くらいの人に来ており、施設の稼働率は悪くなく、展示やイベントが何もない日はない。単に今までのような一般的な緑の公園建築から、もう少し文化的な建築に脱却しようということで、6 年間で会議を 200 回行った。建築して 10 年が経ち、現在増築の話が出ている。公文書に関する法律が変わって貴重な資料を確保しないといけなくなったり、多摩武蔵野地区の生物情報や標本を収めたり、公園・緑に関するアーカイブを作りたい、コンベンションや、多摩の交流展をしたいなどの要望も出ている。

昔の日比谷公園は、モーターショーをしたり、ファッションショーをしたり、日本で最初の色々なイベントは日比谷公園が発祥。公園の使い方は、もっと柔軟であるべきで、今は規制が厳しくなった。「これはいけない、あれはいけない」になってきているが、この公園ではそう言ったことをなくし、もっと広げよう、それが緑の文化に繋がるのではないかという考えで運営をしている。

最近では、食べ物のフェスティバルをしたり、ドッグランを設置して犬も連れて来られるようになっていたりしている。昔は公園に犬を連れて来ることなどできなかったが、最近では人間と犬は不可分な状態になっているので、犬のしつけ方などもここで学べる。料理をできる施設もあり、とにかく色々なことを考えて建築の中に設備を組み込んでいる。

(2) 「環境教育からE S Dへ」 委員長

要旨

(説明内容はパワーポイント資料を参照)

日本では、1980年代から環境教育学会が準備され、今年4月29日にはE S D学会が発足するので、環境教育からE S Dへという流れを説明したい。

E S Dとは、「Environmental Education」、「Education for Sustainable Development」の略。

日本の環境教育は、基本的に公害対策・自然破壊への対応など、汚染をゼロにする社会科学的アプローチがメインだったが、近代化の波と共に自然・環境共生へと変わり、「内なる自然」という言葉を公害時代の「外なる自然」と対で使っているが、だんだんと総合的に取り組む必要が出てきた。

今は、持続性と創造性を加味した地域・社会づくりが必要となっており、さらに、経済的な枠組みでは量れない共感性・ホリスティックなアプローチが求められている。

1972年にストックホルムで「国連人間環境宣言」が出され、大きな環境破壊が指摘され、1977年に「トビリシ宣言」が出された。単に自然を愛でるということではなく、環境の全体性、自然と人工、技術と社会、経済、政治、文化、歴史、倫理、審美などが含まれている。また、学校教育だけでなく、全体に教育しなければいけないことが宣言されている。

1987年には、「われら共有の未来（後にノルウェーの首相となる方が東京で講演）」の中で、現代世代のニーズを満足させるだけでなく、次の世代のニーズ（Wantsではない）を満足させるDevelopment（開発ではなく発展）、内なる自然としての、人間としての成長も含めて取り上げられた。

1999年には環境省の中央環境審議会が「これからの環境教育・環境学習ー持続可能な社会を目指してー」をとりまとめた。環境教育の内容としては、①自然のしくみ、生態系、天然資源の管理、②人間の活動が環境に及ぼす影響、③人間と環境のかかわり方、環境に対する人間の役割、責任、④人間と環境のかかわり方の歴史・文化などをきちんと学ぶことが示された。

環境教育に関わる省庁は、文部科学省、環境省、経済産業省、農林水産省、国土交通所の5省で、これらの省庁が環境教育にきちんと予算をつけているかどうかチェックする仕組みも、この中央環境審議会が担っている。

2004年には日本からの提言で、「持続可能な開発のための教育の10年」が国連で提言され、2005年から実施された。

2014年には、愛知県名古屋市で「E S Dに関するユネスコ世界会議」が開催され、学際性、総合性、価値観・ビジョンの共有、クリティカルな思考と問題、多様性（演劇・音楽などで表現）、参加型意思決定、地域との関わりなどが示された。GAP（グローバルアクションプログラム）として、①政策的支

援、②トレーニングの場に持続可能性の概念を取り入れる、③教員などのスキルアップ、④高校生などユースの活動支援、⑤コミュニティレベル・地方自治体などでESDプログラムを推進していくという5つの柱が提言された。

翌2015年に、「国連SDGs持続可能な開発目標17目標」が設定されたが、日本では、教員の世界では注目を浴びているが、全体としては、なかなか浸透していない。

昨年、文部科学省は、社会に開かれた教育課程にするということで、主体的な学びを、多様性を前提に、協働・コラボレーションしていくことを示した。どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るかを、知識の量ではなく、どう知識を活用していくかを教えることが学校の役割とされた。

自然・文化・社会・人がどうつながっているかはとても見分けにくい。地球公共財の視点を明確にして、あらゆる生命体が将来にわたって持続的に生きていくための共有の資源をどうしていくかが問われている。

環境教育からESDになっていくと、人と人、人と自然、人と地域、人と文化・歴史、人と地球との関係の再構築が求められ、問題そのものを学ぶというものではない。ESDは、環境をトピックとして学ぶものと考えている。

1996年には、21世紀の教育は探究創出表現型の教育観に変えていくべきという考え方が示され、学びと教え（先生も子どもたちから学び、地域の大人も子どもたちから学ぶ）の関係や、単なる問題を教えるのではなく、異種への対応なども求められている。伝統知と科学知を統合していくということが、重要ではないかと考えている。

学びは多くの知識や技能を身に付けることではなく、疑問や好奇心に基づいた活動で出会う事柄を意味づけていくプロセスと捉えている。教員には、その企みを見せない構えが必要。文部科学省が求めている変革はHow to Learn、学び方を学ぶ、aboutではなくthrough、～を通して学ぶことが求められている。

持続可能な発展にむけての環境教育では7つのアプローチがあるが、特に、「かかわり」「つながり」を重視する統合的なアプローチ（ホリスティックなアプローチ）が求められていると思う。

自然は生きる力の原点で、自然体験は学びの土台づくり。でも、自然体験を積ませてもサプリメントではない。いくら知識を蓄えても、センス・オブ・ワンダー（神秘さや不思議さに目を見はる感性）がないとダメだと思っている。

学ぶことと教えることの関係性をもっと考えていく必要がある。地域に開く教育課程ということで、この3月には学習指導要領が改訂された。これは地域のコミュニティの再生を目指すもので、武蔵野市にはコミセンの歴史もあるので、そうした市民参加の土壌をもっと深めていけば良いのではないかと。

個人的にはもう少し学びを魅力的にするように、教員研修でよく言っている。単なる問題指摘ではなく、疑問を考え、自分自身でものごとを引き寄せていく力がないといけない。探究的学習、総合的学習の時間を展開すべき。

「地域を育てる、学力をつける」は、東井義男さんの「村を育てる学力」が基になっている。共に創る、社会的創造力、クリエイティブが求められている、エコプラザもそうした形になると良い。

教育の元々の意味、「Educate」はその人の持っているものを外に引き出す、能力を導き出すという意味。学ぶということは、自分自身に問いをつくるということ。氷山に例えると、根っこをどう張らせるかがとても重要。文部科学省のアクティブ・ラーニングは、主体的に、対話的に、深い学びと翻訳され、思考回路を活性化させようということ。

体験はとても大切で、テキストだけでもダメだし、体験だけでも学べない。1996年のユネスコ21世紀教育国際委員会では、①知ることを学ぶ、②為すことを学ぶ、③（他者と）共に生きることを学ぶ、④人間として生きることを学ぶという学習の四本柱を示した。

市民教育として、受験のための勉強ではなく、共同経験としての学び、対話型の学び、価値観の違いをどう超えていくかというのが、エコプラザを考えるときにも必要。

持続可能な地域・社会づくりをするためには、コモンズをどう増やしていくか、エコプラザをどうやって、どういうコラボレーションができるものをつくるのか、共通の価値を共に創っていくことがエコプラザの検討で考えるべき課題。エコプラザでこうした風をつくっていったらと思う。

### 3 意見交換

発言者	要旨
委員	<p>環境省のカウンセラーなどをしている。ESDについて、小中学校で実際にはなかなか進められていないという現場の声が聞こえてくる。これから上手に取り込めたら良いと思う。</p> <p>「みちまちみどり」という情報誌を出しており、今年初めて桜のマップを作成した。武蔵野市はたくさん桜があるが、最近変わったと思うのが桜の種類。いわゆるソメイヨシノを植えなくなった。大きくなるから、虫がつくからといった理由で、ソメイヨシノを自分の家の庭に植える人が少なくなった。河津桜など変わった桜を植えている方が多くなって、街の中を歩いていると、こういった生物多様性もあるのかと感じ、色々な桜の紹介と一緒に桜マップを作ってみた。</p> <p>マップに対して様々な反応があり、見えないところで整備されているのが、少しずつ市民にも感じ取ってもらえていると思う。</p>
委員長	<p>そういうのもエコプラザのワークショップで行い、紹介し続けていけたら良い。例えば、造園家の方や環境デザインの先生もいらっしゃるので、色々なことが展開できると思う。</p>
副委員長	<p>35年前に桜にこだわり42種類の桜を使った町田の小山田桜台という団地を設計したことがある。そこで行われるお祭りが15年くらいして、相当評判になり10万人もの人が来るようになったと聞いている。</p>
委員	<p>花みどり文化センターにオープンの時から携わっており、「たま工業交流展」でも関わりがあった。今回、環境のデザインについて、開発者やつくった方の話を聞くと、より深くわかるものだと感じた。</p> <p>交流展の来場者に話を聞いた際、真四角の建物だとつまらないが、この建物は入った時に一番奥まで見えない、路地に入っている様で、先に何があるのかが気になるところが良いという意見があり、なるほどと思った。</p> <p>設計者の方々がこだわりを持ってつくられた一方、現場で管理をしていく方々にはそれがうまく伝わってなくて、具体的に内容を落とし込んでいく時に、色々な問題が起きた。例えば、芝生があると公園を使用する際に様々な制限が出てきてしまうので一度芝を取っ払ったら、その後戻す時にどこに何の芝を植えるといった細かい指定があり大変だった。現場にどうやって落とし込んでいくか、考え方があるだけに大変な作業だと感じた。</p> <p>また、持続可能という言葉が出てきて、その中で企業との関わり、特に経済の関係が気になった。お金を誰にどう出してもらうか。企業と共同しながら環境をどう捉え、何をするのかというところで色々と感じた。</p>
委員長	<p>2人の意見の中にも、今後エコプラザが考えて行くべき課題が入っている。</p>

委員	<p>我々企業人は、売り上げ・利益を追求するのが常で、普段環境という言葉にはまず興味を示さないが、自分たちの子どもや孫の生活に影響が出る可能性があるという話をすると違う。環境について一人一人が考えることの重要性が見直され、会社としても、一昨年5人しか受けていなかったエコ検定も、今では2800人が受けている状況。</p> <p>会社のプロジェクトとしてCSV（共通価値の創造）を始めた。お客様が離れていかないようにするために、モノを売る、接客をしてサービスを売ることに對し、どう共通価値の創造ができるかということをお問おうとしている。価値を持続させるためには一緒に参画することが非常に重要だが、一企業ですべてはできない。例えば、先ほどの桜の話であれば、活動をされている方や市民の方が桜の展示をお店でして、お店は桜の育成に必要な肥料を売るというように、一緒にどんな目標を持って、どういった手段でやるのかを考える。我々企業はスペースの問題やお客様に対してのアプローチを一緒に取り組める。まだまだやるべきこと、やれることがあると思っている。</p>
委員	<p>小学校のゲストティーチャーをした時に、その学校では1年間、自分の木を決めて調べるという授業があり、最初は全然絵が描けていなかった子どもたちが、1年間公園担当課の人に話を聞いたり、調べたりしていくうちに、木について色々なことを学び、驚くほど木について詳しくなり、博士みたいになった子もいた。学びの質というのは、そういったものをきっかけにして高めていくことなのかなと感じ、とても良い授業だと思った。</p> <p>昭和記念公園の施設は、色々なプログラムを行っていて、大人も子どもも来ていると思う。今の社会だと高齢者が知識を求めて好奇心で来ることが多いのではないかと思う。僕らの地域では、大人によくある知識欲ではなく、経験する機会や新たに学ぶきっかけをつくるのが大切だと思う。その辺に関して、昭和記念公園では、どんな取り組みがあるのかを教えてください。</p>
副委員長	<p>リタイアした人がボランティアで子どもに植物遊びを教えたり、木の見分け方等色々なことを教えたりする会がある。そういった会が同時多発的にできており、全体として把握するのは難しい。</p> <p>10年経つと子どもたちがリピーターとなって来ることがある。教育目的というのを明確にしてしまうと窮屈になってしまうので、遊びながら学んでいくルールさも必要だと思う。学校のプログラムにしてしまうと、どうしても何かを学んで帰らなくてはいけないという強迫観念が出てくるので、そうではなく色々なプログラムを柔軟に多様に作れば良い。</p> <p>ごみについても同じだと思う。ごみは減らさなくてはいけないという政策的観点で義務として言われるより、生活の中で、この方が環境全体に対して良いというのがわかればすぐ行動に結びつく。色々な視点からのアプローチが引き</p>

	出せるようなプログラムが必要。
委員長	文部科学省がなぜアクティブ・ラーニングに舵を切ったかという、主体的に対話的に深い学びをするため。木の変化を描かせるだけで子どもは発見していく。
委員	<p>クリーン武蔵野でゴミ減量を行っている。生ごみを堆肥化させて、その堆肥を使って野菜を作る仕事がこの1～2年の間に増えてきた。</p> <p>堆肥で高齢者施設の屋上に菜園もつくった。屋上でも黒土を使えば陸と同じように野菜が育つ。普段は誰の目にもさらされない場所だが、収穫の時には、お年寄りたちがこんな場所があったのかと驚くと同時に、大変感動されていた。現在、クリーンセンターの屋上でも、建物の運営をしている荏原環境プラントと一緒に野菜を作り始めた。都市の中で、民・民の力でこんなことを始めている。</p> <p>委員長の話を聞いて、平均年齢 70 半ばの高齢者部隊のボランティアである我々の取り組みの中でも、まさにESDが行われていると思った。高齢者は、教育という言葉は嫌がるが、疑問や好奇心に基づいた活動という言葉で言い換えれば、まさにこのESDだと思う。この中で、一番悩ましいのは持続可能性を高めること。高齢者が続けていくにはこれを楽しみながらやっていけること、しんどすぎても続かない。</p> <p>エコプラザというのは、サポーターを探す場であり、各地域の人材を発掘する場だと思っている。</p>
委員	<p>ESDに対しては、期待と心配がある。広島の中学校で「このまちにくらしたいプロジェクト」という、30年後までこのまちで暮らし続けるためにはどうしたら良いかを中学生自身が考え、学校と地域が支えていく取り組みを行った。もともと中学校の校長先生がとてもESDに理解のある人で、立ち上がったが、校長先生が交代した途端に状況が変わり、地域の公民館が引き受けて、公民館の事業として、地域の大人が支えながら実施している。プロジェクトでは主に部活をしていない子たちが活躍していて、中学生に身近な公園をテーマに取り上げたところが面白い。</p> <p>ESDには可能性がある。しかし、学校や地域の人たちの理解や協力がなくて難しいし、土壌となるコモンズをつくっていかないといけない。エコプラザが、そこにどうはまるのかというのは大きな課題だと思う。チャレンジし甲斐がある。</p>
委員	メタボリズムや増殖していくという考え方、收藏しないという考えが面白い。エコプラザにあてはまるかはわからないが、施設が常に動いていて、完成としない、時代とともに価値観が変化していくという、環境を固定概念化しないというのが新鮮だった。

	<p>長島委員がおっしゃった見通せないところが良いということや、答えを教えるのではなく問題を考えさせる、一直線に目標に近づくのではなく、過程をどう楽しめるかを伝えられる、エコプラザがそうした探究創出型の常にならなくなっていく施設になったら良い。</p>
委員長	<p>公衆トイレを良くする活動の中で、羽田空港のトイレについて外国の方から、日本のトイレは使い方がすべて指定されているため、使えるトイレが少ないと言われたことがある。案内表示で、親子が入るトイレ、障害のある方のトイレとなっているので使えないという意見だった。私たちはもっと固定観念を持たないでつくるべきだと思った。</p> <p>今後、施設を見学しながら管理マネジメントの在り方を考えていく。世代を超えて学び合うことがどういうことなのか、工場棟とエコプラザの間の芝生広場の使い方なども皆で考えていきたい。</p>
委員	<p>最終的には、具体的に市民にわかやすく、読んでもらえる報告書を作っていくようにこの会議で議論をしていく必要がある。今回は色々なテーマで話が出たが、今後まとめていく方向で議論していかないといけないと思う。次の見学を生かしてどうまとめていくか、話し合っていけたら良い。</p>